

逃げない救い主

[マタイによる福音書 16 章 13～28 節]

一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山沿いのベトファゲに来たとき、イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、言われた。「向こうの村へ行きなさい。するとすぐ、ろばが見つからないで、一緒に子ろばのいるのが見つかる。それをほどこいて、わたしのところに引いて来なさい。もし、だれかが何か言ったら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。すぐ渡してくれる。」それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった。「シオンの娘に告げよ。『見よ、お前の王がお前のところにおいでになる、柔和な方で、ろばに乗り、荷を負うろばの子、子ろばに乗って。』」

弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにし、ろばと子ろばを引いて来て、その上に服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。大勢の群衆が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は木の枝を切って道に敷いた。そして群衆は、イエスの前に行く者も後に従う者も叫んだ。「ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ。」イエスがエルサレムに入られると、都中の者が、「いったい、これはどういう人だ」と言って騒いだ。そこで群衆は、「この方は、ガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ」と言った。

[1] エルサレムに入られる主イエス

只今ご一緒に歌いました讚美歌は、イエス・キリストがロバの子の背にまたがって都エルサレムに入って来られた、その時の光景を思い浮かべながら作られた讚美歌です。ヘンデルが作曲したとても明るく、堂々とした曲ですね。今日の聖書の箇所にもありました、イエス様を迎えた群衆が、「ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ」と、賛美の声を挙げたということのを思い起こさせる讚美歌だと思います。

ある人が、この時皆から大歓迎された（かのように思える）イエス様の、エルサレム入城の出来事はイエス様の生涯の中でも最も幸せな時だったのではなかっただろうかと言われました。確かにそのように思えなくもないですが、しかしそれは一面的な見方なのではないかと私は思ってしまいます。この出来事の日から、いわゆる「受難週」が始まります。それは今日の「招きの聖句」でもお読みしましたが、ここにはイエス様の覚悟が、深く込められていると思うのです。ルカによる福音書の 13 章 33 節にはこうありました。「だが、わたしは今日も明日も、

その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ」。教会歴でこの時期は丁度レントの時期でもあります。

[2] 人々は本当にイエス様を喜んで迎えたのか

さて今日の箇所は、とても目に浮かびやすい場面のようにも思います。ロバの子に乗ってエルサレムに入って来られる救い主のお姿。ここには多くの人々の迎える声も聞こえてきます。映画などにもよく描かれます。…ただ私はこれ迄、正直に言って今一つピンとこないものを感じていました。なぜイエス様はこのような形でご自分の最期の6日間が始まるエルサレムに入って来られたのか。

それは、今日の聖書の中にもその理由が書かれていました。旧約の預言の成就のためだと言うのですね。4～5節にこうあります。

「それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった。＜シオンの娘に告げよ。『見よ、お前の王がお前のところにおいでになる、柔和な方で、ろばに乗り、荷を負うろばの子、子ろばに乗って。』＞」

正にこの**ゼカリヤ書9章**に書かれていたことは、自分のことなのだということを公に示されるためにイエス様はこのような形で神の都エルサレムに入って来られたのだ、という理解をマタイも示している訳です。これもとても大きなことだと思います。旧約で預言されていた救い主は、**権力を持ってではなく、柔和なお方としてやって来る＜平和の主＞なのだ**、というそういう図式がここにある。

しかし、そのことは頭では納得出来るのですが、どこか説明っぽいような気がしてしまいます。それも確かに大事な意味でしょう。けれども私はこの時の光景というものを想像してみますと、説明以上に胸に迫ってくる主のお姿があるように思ったのです。それは、この主イエスのお姿は**決して“格好いいお姿”ではなく、むしろ格好悪い、滑稽な姿だ**ということなのです。例えば美しいサラブレッドの馬にまたがる凛々しい姿であるならば見栄えがするでしょう。しかしそうではなく、**愚鈍の象徴とも言えるロバ**、しかもまだまだ**小さなロバの子**に乗っている安っぽい着物をまとった大の男の姿です。多くの人々は目を丸くしたと思います。これは一体何だと。せせら笑った人たちも多かったのではないのでしょうか？

8～9節にこうありました。—「**大勢の群衆が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は木の枝を切って道に敷いた。そして群衆は、イエスの前を行く者も後に従う者も叫んだ。「ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ。」**普通に読めば人々の歓呼の声のように聞こえます。恐らくそうなのでしょう。イエス様はこの時民衆から歓迎されていましたから。

しかしまた同時に、イエス様をからかっているように見ることも出来るようにも思いました。私の見方がひねくれているのでしょうか？丁度、ローマの兵士が十字架にお架かりになる直前のイエス様に、茨の冠を被らせ、葦の棒を持たせ、その前にひれ伏して「ユダヤ人の王、万歳！」と**擲擄**したのと同じようなものをここでも少し感じてしまうのです（マタイ 27:27 以下）。歓呼の声もあり、またからかうような群集心理もある。単純じゃないと思うのです。そしてイエス様は、**そのような人間の思いをも黙々と受け止め**ながら、子ロバに乗って最期の場所・エルサレムに入って行かれたのではないだろうか。

[3] イエス様の覚悟

想像してみてください。この時の主イエスのお姿を。これは見栄えのしないお姿です。恥ずかしいような、嘲笑の的にさえなるようなお姿だと思います。力弱い子ロバに乗る大の男。普通に歩いた方がよっぽど早いでしょう。これは、もしかしたら**十字架と同じ**のではないかと思ったのです。力を誇示することとは真逆、恥をも厭わない、何も出来ない救い主です。しかし、逆説的ですが、だからこそ主イエスは私たちの救い主なのだと思うのです。

私の両親の話で恐縮なのですが、先週父が入院したという報告をし、何人かの方々からお祈りしていますと言われ、とても嬉しく思っています。父は 92 歳、母の方も 89 歳、それぞれ、「弱さ」をさらけ出しようにして生きていると言ってもよい状態です。数日前に病室で会った父の声はかなり力を失っていましたし、また、施設の中でほぼ寝たきりの母は酸素吸入が手放せず、姿勢を変えるのも一人では困難な中であって生きています。そして、私は本当の二人の辛さ、恐れ、悲しみは分からないのです。それはやはり無理なのですね。…けれども、今日の聖書箇所、私はとても慰めと光を頂いたように思っているのです。それはどういうことかと言うと、イエス様は実に格好悪いノロノロした姿を、衆目・白日の下にさらし、まるで荷物ようになってロバに運ばれておられるその姿に、ああ、今弱さの中に生きている私の親たちの姿と一つになってくれているのだなと思ったのです。そして、神の国の約束を私たち罪人に与えるために、**十字架への道を、ゆっくりゆっくりではあるけれども、決して後戻りせず、後に引き返すこともせず、堂々と前に進まれているのだ**なと思いました。

私は思うのですが、ロバの子に委ねているということは、**物凄い覚悟**だと思います。馬であるなら、疾走します。その場から消えることも早いです。でもロバは遅いのです。イエス様とロバ。逃げも隠れも出来ません。神様の救いの御計画は、揺るがない。逃げも隠れもしない。「**主がお入り用なのです**」との一言に、ロ

バの持ち主は不思議なようにロバを差し出しました。もう永遠の昔から定まっていたかのように。そうです、**神様の深い御計画は、人間の思いを超えて、着実に前へ前へと進む**のです。その神の国の約束が打ち立てられる**最終地点・十字架**に向かって、主イエス様は逃げずに、**擲擧**されようが進んで行かれるのです。

[4]「主がお入り用なのです」

この時、イエス様は**荷物のように自分が運ばれる**ことを良しとしているのです（ロバの主な仕事は重荷を負うということです）。そして私は思いました。**イエス様は、急がない人**なのだなど。私たちも、自分が取り残されたかのような孤独感や暗闇の中に置き去りにされたかのように思うことがあるのではないのでしょうか？人間は弱くなることあるのです。急ぐことが出来なくなることあるのですね。今の時代は、またこのコロナの時代は、人を冷酷に選別するようになってしまう時代なのかもしれないと思います。そういう中で、この、敢えて子ロバにお乗りになるイエス様のお姿は私たちに語っていると思うのです。…**悲しみにうずくまっている私たち、前に進む力を失った私たち、罪の重荷に押し潰されそうになっている私たち**を本当に知って、「**私こそがあなたの主だ**」と宣言し、私たちと一緒にいて、**あなたと一緒に歩みたい**と、誰よりも遅い人となって下さったのがイエス様なのではないのでしょうか。私は、そのように思えてなりません。**イエス様は走らないお方**なのです。

教会も、このゆっくり歩む子ロバのようでありたいと思います。本当意味で**休める場所**。このお方が**私たちの重荷を背負って下さっていますから、私たちの深い罪さえも引き受けて下さっていますから**、ここで本当に休息して、またイエス様に歩調を合わせて頂いて、様々な辛さを抱えながらもイエス様と一緒に生きていく。また、**お互いに祈り合っていく**。そのような「**交わり**」がある所、それはこの世に教会をおいて他には無いのではないのでしょうか。主は、今朝も私たち一人ひとりに語りかけておられると思います。—「**主がお入り用なのです**」と。

教会の中心には、この私たちをもお用い下さるイエス様いて下さいます。受難節でもあり、また明日から年度末の月をも迎えます。新しい年度の幻を描きながら、主にあってご一緒に歩んで行きたいと思えます。

お祈り致します。